

砂地(すな)ともじ

山口

「サツポロ西瓜」やカボチャの「大浜みやこ」の産地として名をはせる山口地区。昔も今も砂地という土壌の特性を持っています。

山口地区は、明治14年に山口県から宮崎源次右エ門らが移住したことにより開拓が始まったそうです。その頃、十勝地方で発生したバッタの大群が、日高を通り、石狩地方を襲いました。バッタの食害はすさまじく、国や道は、多額の費用を投じて対策を講じました。山口地区には、砂地に産み付



▲昭和43年に建立され、後に札幌市文化財史跡第1号の指定を受けたバッタ塚の石碑

けられた卵と成虫を埋めて土で覆いかぶせて退治した跡が、今も「バッタ塚」として残っています。

また、山口地区では、砂地の特性を生かした野菜栽培が行われていました。大正5年にスイカの栽培に成功した後は、販路の拡大や栽培法の開発、宣伝の効果などもあり、「山口スイカ」の名が広まってきました。スイカの生産技術は、カボチャにも応用され、後に全国ブランドとなる「大浜みやこ」の誕生につながりました。

昭和50年には、山口県産との混同を避けようと「サツポロ西瓜」に名を変え、札幌のブランド農産物として現在も親しまれています。

手稲いま・むかし

街を歩けば、さまざまな地名や石碑に出会います。それらには、当時の人々や街の様子が隠されており、「いま」と「むかし」を結びつけてくれるものです。

今月は、手稲の史跡をまとめた「手稲区歴史ガイドマップ」から3つの話を紹介。ガイドマップと一緒に史跡をたどり、昔に思いをはせてみませんか。

このページに関するお問い合わせは 総務企画課広聴係 ☎ 681-2432



配布場所
区役所1階⑩番窓口広聴係
区役所3階地域振興課

街の交流場所

手稲駅

JR手稲駅は、一日の乗降客数が北海道内で二番目に多く、約1万5千人の人々が行き交います。手稲の玄関口であるこの駅は、明治14年に「軽川停車場(駅)」として開設されました。「軽川」というのは当時の駅周辺の地名。その由来は付近の川が、夏になると水が枯れるため「涸川」と呼ばれ、それがなまったものと伝えられています。

昭和9年の駅舎の改築では、手稲パラダイスヒュッテを模した丸太小屋風の建物になりました。以来、約50年にわたって手稲の人々に親しまれま



▲昭和52年の駅前の様子(札幌市公文書館所蔵)



▲JR手稲駅自由通路「あいくる」の名称は、「会い」「愛」「来る」などに由来

した。かつては、駅長室に地域の人々が自然に集まり、社交場のような状態になっていたこともあったそうです。

「軽川駅」から「手稲駅」に名称が変更されたのは、昭和27年。その後、手稲町と札幌市との合併や都市開発の進展など、街が大きく発展しました。駅の乗降客も爆発的に増え、駅舎が手狭になり、昭和57年に建て替えられました。旧駅舎は移築されて喫茶店となり、平成11年までその姿が残っていたそうです。

現在の手稲駅の駅舎は4代目で平成14年に完成。駅の南北をつなぐ自由通路「あいくる」では、イベントなどが行われています。今も昔も手稲駅は、人々が交流する場所です。